

北多摩二号水再生センター界隈の今昔

『多摩のあゆみ』という季刊誌があります。創刊は昭和五十年十一月。平成二十三年十一月現在、三十六年間に延べ一四四号が刊行されています。気軽に郷土を語り学び知る「茶の間の郷土誌」たることをモットーとしているとのこと。毎号一万余部を刷り、希望者に無料で配布しています。たましん地域文化財団（この地域の金融機関である多摩中央信用金庫が母体）が編集・発行を行っています。ほかに、たましん歴史・美術館や御岳美術館なども運営しています。



▲ 歴史資料室（『多摩のあゆみ』138号より）

「たましん歴史・美術館」は、JR中央線国立（くにたち）駅南口のロータリー前にあり、その一面に歴史資料室が設けられています。収集した、あるいは寄贈された膨大な郷土資料（図書、雑誌、地図、絵葉書、チラシ、写真）が市町村別にきちんと整理されています。開架式の書庫は閲覧でき、資料の貸し出しはしていませんがコピーはできます。専門の司書の方が、所蔵図書全般について親切に相談にのってくれます。

今回の職場界隈探訪は、この『多摩のあゆみ』に掲載されている国立関係の記事を大いに参考にさせていただきながら、府中との市界にある北多摩二号水再生センター界隈の今昔を訪ねました。探訪ルートは、国立駅南口↓一橋大学構内↓谷保天満宮↓北多摩二号水再生センター↓古民家↓矢川緑地です。

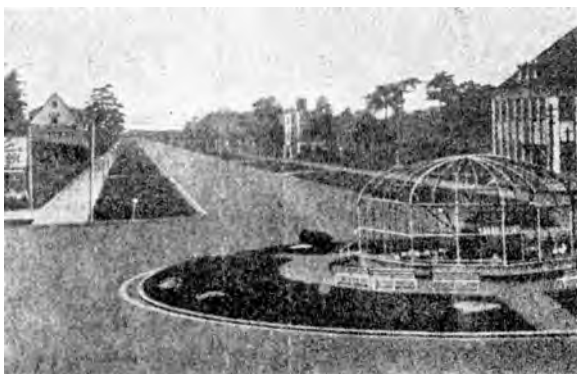
国立駅

晩秋にしてはやや汗ばむ好天のある日、複々線化の高架工事が行われている中央線国立駅南口に降り立ちました。駅舎も新たに建替え中でした。



▲ 開業時の国立駅（『多摩のあゆみ』6号より）

大正十四年四月一日に、当時計画されていた学園都市の表玄関として国分寺駅と立川駅との間に誘致され、鳴り物入りで開業したのが国立駅です。その割には駅名の由来は、既設の二つの駅の頭文字を取ってつなげただけという単純なものです。赤い三角屋根に、アール・デコ風のめくら窓やロマネスク調の半円形窓を配した駅舎正面のデザインは、たいへんハイカラなものでした。



▲ 国立駅前の二十四間道路（『多摩のあゆみ』6号より）

駅の南口にはたつぷりとゆとりを取った広場が作られ、その中央部に花壇と水禽舎が置かれました。南方にある谷保天満宮に向けて大通り（幅四十四メートル、長さ二キロメートル）が造られ、「二橋通り」と名付けられました。これは誘致予定の東京商科大学が当時、神田一橋にあったことにちなんでいます。東京商科大学が一橋大学と名称を改めたのは戦後になってからです。この通りがこんなに幅広く造られたのは、京王線府中駅から線路を引き込んでくる構想があったからだといわれています。車道と歩道の区別があり、さらにその間に緩衝ゾーンとして芝地がありました。



▲ 開業時の駅前広場（『多摩のあゆみ』70号より）

その後、そこに二〇〇本近くのソメイヨシノと一〇〇本を超す銀杏が植えられ、現在では巨木に育ち、「新東京百景」や「新・東京街路樹一〇景」に選ばれています。

さらに、駅の南西と南東に向けて放射状の「富士見通り」と「旭通り」が造られました。

開業当時、駅前には箱根土地（株）の案内所と見本建築が右側に三軒、左側に二軒ほどあり、他に数軒の下宿屋と商店、それに少し離れて郵便局があった程度でした。乗り物といえば、明治時代の人力車が二台だけで、どういうわけか富士見通りには熊小屋や猿小舎があったそうです。

国立大学町の開発

地元在住の郷土史家・原田重久氏は、『多摩のあゆみ』第6号に寄稿した「国立大学町の開発事情」の中で、一営利会社の手によって生まれた町との副題を付けて、この学園都市開発の経緯を詳しく述べています。少し長くなりますが、その一部を抜粋して以下に紹介します。ちなみに、原田氏はNHKの専属作家としてラジオやテレビの台本を二千五百本ほど執筆するかわら、多摩の民話や伝説を収集・研究していた方で、『谷保から国立へ』、『国立風土記』などの郷土史関係の著作があります。

国立の成立ちに関して、

『国立市の前身は谷保村と称し、昭和二十六年の町制施行と共に国立町と改められた。かつての谷保村は、甲州街道を中心に四百戸内外の農家が東西に連なる純農村であった。：昭和初年まで、全村を通じて日用品を売る荒物屋が五く六軒という寥々たる寒村だった。あとの九割以上が農家である。：村の人々は、鎮守谷保天神を心のよりどころとして、延喜の昔から、平凡で単調な農民の生活をくりかえしてきたのである。』

と、甲州街道沿いの一寒村にすぎなかったと述べています。そして、開発予定地は、

『甲州街道に平行して、その北側を南武線が通り、畑地が広がっていた。その北部の拝島街道以北は一帯の雑木林で、約百万坪という広大な地域には勿論人家らしきものはなかった。この雑木林の海が、隣接する国分寺村と立川町との間の緩衝地帯になっていた。：樹林地帯は、落葉を利用する農家の堆肥源だった。また、雑木は、十五、六年目毎に伐採して燃料とした。これらの二つの利用価値から、農家にとっては重要な資源林でもあったのだ。これらの、落葉や雑木を盗む者があって、その見張りをする「番太（ばんた）」なるものが地主に雇用されて居り、常時林中を巡回していた。村の人々は、この樹林地帯を「ヤマ」と呼んでいた。』

の如く、無人の雑木林で村の三分の一にも当たる広大なものでした。こうした地域に関東大震災後、降ってわいたような開発話が持ち込まれたのです。それは、

『関東大震災があったあくる年の、大正十三年夏のある日、谷保村の村長西野寛司氏は、その頃、土地開発事業でめきめきと斯界に頭角を現わしていた箱根土地株式会社社長・堤康次郎の訪問をうけた。訪問の要旨は、谷保村北部の山林地帯を開発し、中央線に駅を誘致し、東京神田にある東京商科大学その他の学校を招致して、ここを一大学園都市としたい、というもので…。この日が端緒となって、平穩無風の多摩の一寒村谷保村に、時ならぬ波風が立ちはじめた。：箱根土地会社が買取契約をしたのは、反対地主の所有地などを除いて、実測面積八十万坪余であり、：』

といったものでした。この計画はあつという間に実施に移されます。その結果、

『樹海さながらだったヤマには、見る見るうちに道路が縦横に作られ、土地の区画割は、二百坪を単位に整然と定められた。地区は、駅南口正面の大通りを境に、東側を東区、西側は立川境を西区、中央部を中区とした。：分譲地の整備が大半進んだところで、会社は土地の売り出しを開始した。：坪三円で売り渡した土地が一年そこそこのうちに十五倍近くにはね上っていた。：分譲地にぼつぼつ住宅が建ち、人が住み始めると、谷保の農家の人が野菜を売りに来たり、かつぎの豆腐屋などがやってくるようになった。：商店組合は、昭和六年八月に組織された。このときの会員は三十七名で、つまり、商店が三十七軒あったことになる。：こうして、徐々に国立大学町の形は整ってきたのだが、経営地の売れ行きは依然としてはかばかしくなかった。』

との経緯のなかで終戦を迎えることになりました。

『終戦を迎えて、もはや新しい町づくりどころではなくなった。必然、経営地分譲も再び一頓挫を来した。この大苦難時代を抜けて、国立大学町が発展の様相を呈し始めたのは、昭和三十年以降である。やがて、高度成長とか昭和元禄などと呼ばれる経済界の好調につれて、分譲地の売れ行きも活発化してきた。』



▲ 現在の国立駅前

学校の進出

こうして徐々に整備が進められるなかで、いち早く大正十五年に国立学園小学校が開校し、東京高等音楽院（現国立音楽大学、現在是他所に移る）が移転してきました。ヤマから聞えるトランペットやヴァイオリンの音、そしてソプラノの甲高い歌声に村人は驚いたといいます。

さらに、昭和二年に東京商科大学が移転してきました。国立での一期生である木戸伴氏は、

『殆んど無人に近い武蔵野の一角で、静寂清浄で詩にもなり絵にも画かれる風情は老人の隠遁生活には申分ない環境だが、秩父おろしが吹きすさび、松籟の外は凡てが静止的で活動性に欠け、若人の熱気は捌口がなく、無聊をかこつのも無理はない点多かった。：学生は下宿にも困ったので、寮を建てて貰った。』

と、雑木林を切り開いて生まれたばかりの大学町の姿を語っています。

昭和十六年に桐朋学園が開校し、十九年に都立第五商業学校が、二十年には都立国立中学校が相次いで移転してきました。どれも一橋通りを中心とした立地です。

戦後は、東京女子体育大学やNHK学園や国立音楽大学付属小学校・中学校が生まりました。

文教地区指定運動

昭和二十五年六月に勃発した朝鮮戦争の兵站基地となった立川基地に隣接する国立町は、瞬く間にアメリカ兵の慰安地とされてしまいました。大掛かりな特飲街が計画されているとの噂が伝えられるに至り、「なんとかしなければ」と、まず主婦たちが立ち上がりました。戦後、子供の教育などを考

えて、不便だが閑静で環境のよい国立の地を選んで移り住んできた人たちです。これに、一橋大学の教授・学生をはじめサラリーマンが加わって町の浄化運動が始められ、粘り強い運動の結果、遂に良識が勝利し町の約三分の一が「文教地区」に指定され、昭和二十七年一月をもって施行されました。これによって、待合、料亭、カフェー、料理店、キャバレー、舞踏場の類で風俗営業取締法の適用を受けるものや、ホテル、旅館、劇場、映画館、遊技場などは建てられなくなりました。

開発の発端は一民間会社の手によるものでしたが、町が形成されるとともに新たに転入してきた住民が、自由な形で発展していくことに一定の制約を加える「文教都市」への変身を自らの力で選択し、町のイメージを高めていったのです。

ロージナ茶房

『江分利満氏の優雅な生活』や『居酒屋兆治』などの小説で知られる山口瞳氏は、東京オリピックが開催された昭和三十九年に、東京の下町からこの国立に引越してきました。最初にやったのは、町中を隈なく歩くことだったといえます。そして、いくつかの馴染みの店ができます。なかでも、氏のエッセイにたびたび登場するのが「ロージナ茶房」です。

歴史資料室での下調べが終わった後、司書の方に道順を尋ねると、すぐそばだということでしたので、山口氏のエッセイ『行きつけの店』（ティピーエス・ブリタニカ、一九九三年）で描写されている雰囲気を追体験すべく、立寄ってみることにしました。

山口氏は次のように紹介し、賛辞を贈っています。

『二日おきぐらいに女房を散歩に連れて行く。…一橋の構内を抜け、国立駅前の大通り（通称大学通り）へ出る。この大学通りは、私の知るかぎり、日本で一番美しい大通りである。春は桜と柳、秋は銀杏がいい。…それから、

ロージナ茶房へ寄って休憩する。私はコーヒーを飲み、女房はココアを飲む。女房は、ときにアイスクリームを喫する。小腹が減っていると、私はトーストを食べる。このトーストが特に気に入っているのではない。しかし、バターとジャムのガラスの容器はたいへん気に入っている。…ロージナ茶房は画廊喫茶であり、彫刻もガラス製品も陶器も展示されている。私も一枚の絵を進呈した。…椅子もテーブルも照明も、たとえば椅子のひとつはフランスの教会の椅子を使っているといったように凝っているのだが、凝りすぎにならない。骨董に目が利いても、店内をアンティークで飾りたてるような愚かなことをしない。万事につけて程がよいのである。だから常連客だけの溜り場のようなにはならない。だから若い人でも気易く入ってこられる。』

山口氏と同様、日替わりのコーヒーを所望し、壁に掛けられた十数枚の絵を鑑賞しながら、文化の香り高い町のイメージを店そのものが醸し出している中で味わいました。



▲ ロージナ茶房

一橋大学構内

一橋通りの桜並木を南にしばらく行くと、左右にこんもりとした木立が見えてきました。その中に一橋大学の校舎が点在しています。昭和二年の国立分譲地区割図には、右が東京商科大学、左がその専門部とあります。学校のシンボルとなっている時計台をもつ図書館や兼松講堂の北側に広がる赤松の高木が混じる雑木林に、かつてのヤマの面影が感じられました。



▲ 東京商科大学建設予定地（『多摩のあゆみ』6号より）



▲ 一橋大学構内

南武線谷保駅周辺

谷保駅は、昭和三十二年製の地図では「やば」と表示されていたが、今は「やほ」と濁りません。この一帯には畑地が広がっていましたが、昭和四十年に二十八万坪の農地が区画整理され、2200余戸の富士見団地ができ、住民

が一気に一万人近く増えました。

ところで、谷保駅の近くの横丁に「文蔵」という屋号の赤ちようちんがあり、山口瞳氏はこの常連でもありました。小林幸子の演歌「おもいで酒」が流行っている頃、連載小説を依頼された氏は、この店に通って来ている客たちの会話を膨らませて、日記風の小説を書くことを思いついたといいます。それが『居酒屋兆治』（新潮文庫、昭和六十一年）です。先に紹介した『行きつけの店』の中で、この店のことを次のように案内しています。

『文蔵へ客を連れて行くと誰もが驚く。誰もが喜ぶ。モツ焼きについて私はほとんど不案内だが、とてもうまいんだそうだ。いや、私も非常にうまいと思っているのだけれど他の店を知らないから比較のしようがない。それに、肉が大きいんだそうだ。…私が案内した客が、こんどは一人で文蔵へ行く。しまいには家が遠いのに常連客になってしまおうという男が二人や三人ではない。…いま、文蔵は国立の名物になり名所になっている。そこは町の誰もが気軽に遊びに行ける集会所のようになっている。そこへ行けば会いたいと思っている町の誰彼に会うことができる。』

現在も、同じ場所にモツ焼き屋はありますが、屋号は「婆娑羅（ばさら）」に変わっています。経営者も交代したとのこと。ちなみに『居酒屋兆治』は、舞台を北海道の函館に換えて映画化され、高倉健が主演し話題になりましたので、ご覧になった方も多いことと思います。

谷保天満宮

甲州街道を渡り、大鳥居をくぐり参道を下ると（実は立川段丘の崖を下っているのです）、菅原道真を祭神とする谷保天満宮の社殿に出ます。道真が大宰府へ左遷されたとき、三男の道武もここ谷保の地に流されます。父の死を聞いた道武は父の像を自ら刻んで、日夜これを拜んでいたといいます。後



▲ 清水立場（『江戸名所図会』より）



▲ 木に止まる鶏

に、一社を創建（延喜三年（九〇三））してその霊を祀ったのが社の縁起です。東日本では最古の天満宮で、約百本の紅梅白梅が植えられている雑木林の中に鎮座しています。

二十羽ほどのチャボが境内に放し飼いにされており、何羽かはなんと梅の古木の枝に止まっていました。半ば野生化しているようで珍しい限りです。受験シーズンには、近隣から多数の参拝者が訪れ、絵馬に合格の祈願を込めています。境内の一隅からは「常盤の清水」が湧き、一筋の流れをつくっています。

この神社の近く北西の方角に昔、街道を旅する人たちが一服した茶屋があり、常に清水が湧き出ているところから「清水立場（しみずのたてば）」と呼ばれていました。

『江戸名所図会』にも載っており、その言葉書きに、

『甲州街道の立場にして、此辺ここかしこに清泉湧出する故に清水村の称ありと云う。此地に酒舗ありて、店前清泉沸流す。夏日は索麵を湛^{ひた}して、行人を饗応せり。故に此地往来の人ここに憩ひて、炎暑を避けざるはなし。』とあります。

多摩川沿いの低地

甲州街道の南には東西に続く崖があり、その斜面に緑が残っています。青柳段丘と多摩川低地との境目で、所々から地下水が湧き出しています。

この低地は昭和四十年代まで一面に広がる水田で、多摩川の日野橋付近から取水した府中用水が、これらの水田を支えてきました。

ところで、多摩川の流れは江戸時代の初期に起こった大洪水により南に移動し、現在の河床に固定しましたが、その前の古い多摩川の流路をそのまま利用しているのがこの用水だそうです。また、玉川上水が当初、計画された時の水筋であり、府中まで掘り進んだときに硬い岩盤に



▲ 今も残る水田



▲ 北多摩二号水再生センター

阻まれて、それ以上の工事を断念したものと伝えられています。

昭和四十二年に中央高速道路が開通し、それに伴う国立府中インターチェンジの建設、さらには甲州街道の渋滞を解消するための日野バイパス道路の完成（平成十九年）により、周辺の環境は大きく変貌しました。倉庫が立ち並び、物流拠点になりつつあります。平成元年に運転を開始した北多摩二号水再生センターもこの一画にあります。国立の全域と立川、国分寺の一部区域をカバーしています。センターの敷地が多摩川と接していないため、再生水は一キロメートルほどの埋設放流渠を通じて流されています。

古民家

水再生センターから五分ほどの谷保の城山公園にある、古民家・旧柳澤家を訪ねてみました。もともと甲州街道沿いにあった江戸時代後期の茅葺き入母屋造りを、平成三年にここに移築・復元したものです。古民家の前には水田がわずかながら残っていて、季節になると田に水が張られ、田植え・稲刈りなどの農作業の風景を見ることができます。

旧柳澤家は屋号を「たくあん屋」といい、明治から昭和初期にかけては漬け物屋も営んでいたといいます。囲炉裏で燃やす薪の独特の匂いが立ち込めていました。土間は荒木田土を塩で固めたものを用いているので、埃がたらず水はけも良いとのことです。たまたま昼どきと重なり、ボランティアの地元の奥さん方が見学者に味噌汁を振る舞っていました。

日本クロレラ研究所

古民家の向かいに（株）ヤクルトの中央研究所があります。ここに昔、クロレラを研究する施設がありました。

クロレラは、水田、湖沼などに広く分布している単細胞の藻類です。たんぱく質やビタミン類の含有量が、ふつうの野菜、穀類、乳肉類に比べて群を抜いています。

昭和三十二年に、直径二メートルの円形培養池六基、直径五メートルのものが二基、直径二〇メートルのものが一〇基建設され、クロレラの大量培養の研究がこの地で開始されました。尿素あるいは硝酸カリウムを窒素源とし、各種の無機栄養物を加えてつくった培



▲ 見学者でにぎわう古民家



▲ クロレラの屋外培養タンク

養液を満たし、炭素源として炭酸ガスを送り込む「開放循環法」による培養です。クロレラが適当な濃度に乗まで増殖したとき遠心分離機でクロレラを分離し、さらに乾燥機にかけて乾燥クロレラを得ようとするものです。

ところが、天候、温度、光に左右され、他の微生物にも汚染され予定の生産量が得られず、しかも肝心の乾燥クロレラの消化率が低く、独特な匂いがあり、コストも高くつくなど思わぬ欠点が明らかになりました。

その後、この研究所は（株）ヤクルトの中央研究所に統合されますが、昭和三十九年に、クロレラを光なし

で無菌的にタンク内で大量培養する技術開発に成功します。これまでの光合成屋外培養法に比べて、生産性、品質、安全性、味覚のすべての点で勝っており、この方法によって健康補助食品としてのクロレラが商品化されました。

一方、これと期を一にして、皆が嫌がる尿尿をなんとか食糧に変化させる方法はないかと、ひたすら研究に取り組んできていた中村浩氏は、尿尿を栄養源としてクロレラを培養し、これを家畜の餌や人間の食べ物に混ぜるなどして有効利用したらどうかとの考えに至ります。彼の著『糞尿博士・世界漫遊記』（現代教養文庫、昭和四十七年）には、尿尿を栄養源とした緑の高山タンパク質・クロレラの培養に成功するまでの経緯が記されています。

この尿尿処理技術は一時大変注目され、実施設がいくつかわ造られましたが、クロレラの栄養源が尿尿であることが隘路となり、食品や薬品に用いることに対する理解が得られにくく、尿尿処理技術の主流にはなりませんでした。



▲ ヤクルト中央研究所

崖下の小径

ヤクルト中央研究所の裏手に、崖下からの湧き水を集めた小さな流れがあります。崖といっても高低差は、高いところでせいぜい5mくらいです。樹々が密に生い茂り、それと気づかなければ、ただの傾斜地の林と見過ごされてしまいそうです。この流れに沿って木道が整備され「小径」が続いています。以前は斜面林の枝が低く張り出し、夏期には草が生い茂っていたそうですが、現在では適時、枝打ち・除草がなされ快適な遊歩道となっています。

この辺りではごく最近まで、「おおせ干し」といって子供会などで水遊びを兼ねて農業用水路を浚う行事があり、自然の美しさを保ってきたそうです。人と自然との共生が働いていたのです。

くにたち郷土文化館

この小径を遡ってしばらく行くと、「くにたち郷土文化館へ」との小さな案内標識に出ます。それに従って住宅街を抜けたとたんに、ガラス張りの斬新な建物が目に飛び込んできました。古刹・南養寺の境内と接し、青柳段丘の縁に建っています。

このオープンな平成六年秋で、展示あるいは収蔵されている物の多くは、地元で民具調査や聞き書き調査などを長年にわたって行ってきた



▲ くにたち郷土文化館

二十五年ほど前の一時期、生活排水の流入によりドブ川化していたことがあります。この間の経緯を、上原公子氏の『矢川の水質調査』（第三回下水文化研究発表会講演集、一九九五）でみることにします。なお、上原氏は地元での生活協同組合運動を熱心にされていた方で、後に国立市長を務めています。

『矢川は、立川段丘と青柳段丘の崖線沿いの立川市錦町に湧き出す湧水を水源として、国立市の滝乃川学園下の府中用水合流点までを流れる、一・五キロメートルばかりの短い川である。水源地域は、東京都の緑地保全地域に指定されていて、あちこちから染み出す湧水が、清流にしか見られない水草のナガエミクリやシマアメンボウ、ホトケドジョウを育み、東京近郊では数少ない貴重な清流となっている。

しかし、調査を始めた頃（昭和六十一年五月）は、矢川流域の下水道は整備されておらず（北多摩二号水再生センターの稼働は平成元年）、途中から流入する生活排水は下流に行くほど多くなり、せつかくの清流も途中から一変して悪臭を放つドブとなっていた。…身近な川の調査をすること、



▲ 矢川緑地

失ってしまった水を自分たちの水として取り戻せないだろうか。そんな望みを持って矢川の水質調査をすることになった。…

真夏日が続く平成七年（一九九五）の夏、矢川は水源の湧水が身近にあるため、その水は夏尚冷たく、矢川の流れに足を浸す人達は歓声を上げる。下水道整備前には、目を覆うばかりのドブ川だった甲州街道より下流も、上流と同じ水の色となり、ヒルしか棲まなかった川に水草が生え始めた。今や矢川は、名実ともに清流となった。

しかし、細々とした川にたて続けに起こった、工事によるダメージは余りにも大きく、水質は良くなったが生命としての矢川は、大きなものを失った。都内髓一だったナガエミクリは半減し、コルゲート管を設置した部分では、その後もナガエミクリは減少し続け、今は小石の河床がむきだしのみである。』

上原氏らは失われた矢川の生命の再生を願って、その後も水草の観察をも含めた矢川の環境調査を継続して行なっています。

（文責 地田）

参考資料（文中で明記したものを除く）

- 「多摩地域の下水道整備のあゆみ」 多摩のあゆみ 126号
- 「民具調査・聞き書き・伝承」 多摩のあゆみ 120号
- 「里山だいすきガイドマップ」 くにたち郷土文化館
- 「わたしたちの町 国立」 郵政国立研究会

探訪余話

平成十一年から国立市の教育長を四年間務めた石井昌浩氏は、自身の著『学校が泣いているー文教都市国立からのレポートー』（産経新聞ニュースサー

ビス、二〇〇三)の中で、二つの顔を持つ国立の文化の特徴を次のように語っています。

『今までの国立の教育の特徴でございしますが、私は、その歴史的な推移といえますか、そういうものについて考えてみますと、一つは、まちの中心に一橋大学が位置するという、このことがいわゆる文教都市の象徴としてかなり意味を持つのではないかと感じいたします。』

いわゆる文化人とか、インテリが多くて、それなりの知的雰囲気があります。そして、このまちは独特の個性を備えているまちではないかなという、そんな感じがいたします。

それと同時に、南部地区のいわば大変伝統に裏打ちされた自然と文化がともにあるということで、申すまでもないですが、谷保天満宮ですとか、南養寺、あるいは矢川の緑地とか、矢川の流水などなど、あと今、話題になっておりますママ下湧水ですとか、こういったものが一体として国立の文化を形づくっている、そういうことが言えると思います。

その上で、さらに歴史的に見ると特徴的なのは、市民運動がかなり活発なまちという感じがいたします。昭和二十六年、二十七年に行われた文教地区指定をめぐる市民自治の伝統というものが、大変強く根づいている地域であろうと思います。こういうのが私の思う教育の中の歴史的な推移の背景にある感じがいたします。そして、教育にかかわって考えますと、教育でいわゆる自治の歴史というものも、色濃く国立の中では形成されているような感じがいたします。』